総務常任委員会行政視察報告書

１．視察日程　　平成２９年８月２日（水）～８月４日（金）

２．視察場所　　北海道亀田郡七飯町－８月２日
　　北海道二海郡八雲町－８月３日

３．視察参加者　　堀　典義　　岩尾 育郎　　中山田　昭徳
　　河野　正治　　田原　祐二　　阿部　素也
　　（随行）内野　剛　　田城　貴代

４．七飯町出席者　町議会議長　坂田邦彦　　議会事務局長　釣谷隆士
　　経済部都市住宅課長　伍楼司　　経済部商工観光課長
　　磯場嘉和
　　八雲町出席者　町議会議長　能登谷正人　　議会事務局長　山田耕三
　　商工観光労政課商工観光係長　佐々木直樹
　　企画振興課企画係長　南川達哉

５．視察事項

◎七飯町　「道の駅」事業について
（１）七飯町概要
　位置（地勢）　北海道は渡島半島の南部に位置する。
　北海道の表玄関である函館市からは北西に約 16 ㎞、車で約 30 分の距離、道庁所在地である札幌市までは JR 函館本線で約３時間の距離にある。北は森町、東北は鹿部町、東南は函館市、西方は北斗市に隣接している。
　大沼トンネルを境に南部と北部に分かれ人口約 28,500 人で 216 ㎢の面積を有する。降水量は比較的少なく、年平均気温は８℃前後と道内では比較的温暖であるうえ、四季の区別が感じられる良好な自然環境を有している。
　北部の大沼地区には活火山である駒ヶ岳（標高 1,131m）や大沼国定公園があるほか、平坦地は水田、山麓一帯には酪農・畜産・畑作地帯が広がっている。
　南部は、ほぼ中央を国道５号線が縦断しており国道沿線は市街地として開発が進んでいる。
　北海道の新幹線が開業し、今後は北海道縦貫自動車道の開通が予定され更に交通手段が充実することから道南の交通結節点としての恵まれた立地条件を有している。

歴史は元和元年（1615 年）名主制度があり、5 村 3 郷元年合併した町で幕末の頃は、現在の各字は箱館奉行の配下に属していた。その後幾多の合併・編入を経て昭和 32 年 1 月 1 日町制が施行された。

（２）七飯町視察会議要旨

会議の冒頭、七飯町議会の坂田議長よりご挨拶をいただいた。七飯町は気候に恵まれていること、その基幹産業は農業であること、水道は全て湧水であること、主要道の 5 号線が町内を縦貫していること、国内における西洋りんご栽培の発祥地であり高級品種の『ななみつき』は 1 玉 1,000 円程度で販売されていること、町内北部の酪農地帯では 20,000 頭の乳牛が飼養されていること、また人口動態としては横ばいで推移しているものの自然減を補う社会増は主に別荘地的な目的であること、またそうした人口問題の対策として空き家バンクなどの施策を講じている旨の説明をいただいた。

その後、磯場商工観光課長、伍楼都市住宅課長より「道の駅事業」について説明を頂いた。以下、その内容について記すものとする。

まず、七飯町は函館市に隣接しており、町内の消費がどうしても同市へ流れる傾向があった為、それを少しでも町内での消費に結びつけたいという点と、平成 28 年 3 月に北海道新幹線の新青森・新函館北斗間が開業し、新函館北斗駅は函館市への最寄り駅となるのだが、その流れを七飯町に引き込もうというのが大きな要因だったということだった。

位置の選定については、同町が構想した道の駅が近隣地域内での需要・消費を重視する『地域センター型』というよりも、他地域からの同町の玄関口としての役割を期待する『ゲートウェイ型』であった為、必然的に交通結節点である今回の予定地を選んだとのことであった。予定地は一日の交通量が 23,000 台の国道 5 号線上にある。また新函館北斗駅から 5 号線へと接続する交差点に隣接した地点である。並行して函館新道が整備中であり同新道のインターチェンジも近いという好条件の場所であるという説明であった。また同 5 号線上にある隣接森町には道の駅があるが、その道の駅以南には道の駅がないこと、そしてそこからは車で 40 分の場所であり道路利用者にとって利便性のよい位置であるとのことであった。

施設の概要としては、駐車場一般１４８台、身障者用８台、大型車２３台、管理用２４大、ポケットパーク（築山・親水公園）約１，５８０㎡、イベント広場３５０㎡、民間活力導入スペース約２，０００㎡（後述する）、主要建物は鉄骨平屋建て、建築面積１２７１．４６㎡、延べ床面積９８６．２６㎡ということであった。

運営方式としては、指定管理を予定し、現在公募中とのことであった。

七飯町の道の駅の特徴の一つとして、今回整備する道の駅の敷地内に『民間活力導入事業』として民設民営の建物が建設されるとのことであった。その趣旨は飲食提供、特産品販売、文化振興などの地域連携機能は核であり選民的なノウハウが必要との判断から民間活力の導入を図るというものであった。その事業者はプロポーザル方式によって選定され、すでに『株式会社　男爵倶楽部』という函館市内に於いてリゾートホテル経営を行っている会社に決定しているということで、いただいた資料にはその建物のイメージ図も掲載されていた。その画はなかなか奇抜なものであった。

　その後、質疑に入った。委員からは位置の選定にあたっての合意形成はうまくいったのかという点、建設用地、基本計画の委託金額、民間活力導入事業に選定された事業者や用地の賃料についてなどの質問がなされた。位置においては、ほぼ異論なく今回の場所に決まったという話であり、民間所有の土地を買収したということであった。プロポーザルの結果選定された事業者は、観光面でかなり実績のある企業で、財務的にもしっかりしており事業の継続性についても問題ないという判断のようであった。

（３）考察

現在、杵築市に於いて計画段階にある『道の駅』事業について、現在進行形で建設が進んでいるという七飯町の『道の駅』事業を視察した。七飯町役場での視察会議のほかに、道中の車窓からは建設中の施設を見ることもできた。

今回の七飯町は地域住民の利用を重視した『地域センター型』の道の駅ではなく、北海道新幹線開業や北海道縦貫自動車道の整備に伴う人の流れを町内に取り込もうという『ゲートウェイ型』での整備計画ということであり、そういった意味においては、杵築市で現在計画しているものと同じであった。しかし、杵築市での交通量との差異や、結節点としての役割、そこを玄関口として市内に客を呼び込むことができるのかという点においては、杵築市の計画には疑問が残るといわざるを得ない。また、敷地面積も公園、広場などを整備して十分な面積が確保されている様子で、杵築市の予定地である県有インターチェンジ跡では少し手狭ではないかという印象を持った。民間活力を導入して、民設民営の建物を併設させるという思い切った手法も意外なものであった。本館の運営に関しては指定管理ということだったが、運営主体や方法についてはこれからということで、七飯町の道の駅にもかなりの検討の余地があるものと思われる。

以上の視察結果から観ると、そもそも私たち杵築市民が求めている道の駅は『ゲートウェイ型』なのか、『地域センター型』なのか、あるいは両者の性質を併せ持つものはできないのかという議論が不足していたという面は否めないと思われる。しかしながらすでに国・県との協議も進んでいるという事実も受け止める必要もある中で、執行部に於かれては早急に論点を整理して議会側に説明を頂き、今後のスケジュールを示してほしいと考える。

会議の最後に七飯町の坂田議長が、「失敗は許されない事業であるという認識で臨んでいる。」とおっしゃられていた。私たちの杵築市も同様であらなければならないのは言うまでもないと感じた。

◎　八雲町　・アンテナショップ型居酒屋の取り組み

（１）八雲町概要

八雲町は北海道渡島半島の北部にあり、道南の拠点都市函館市と全道有数の重工業都市室蘭市の中間に位置します。東は内浦湾（噴火湾）、西は日本海に面し、北は長万部町、今金町、せたな町、南は森町、厚沢部町、乙部町と接しています。人口約 17100 人、面積は約９５６平方 km で渡島支庁管内最大の面積をもちます。渡島山系をはさんで、東は遊楽部川、野田追川、落部川が流れ、西は相沼内川、見市川が流れており、農業・漁業ともに恵まれた立地となっています

平成１７年１０月１日、渡島山系をはさんで隣り合っていた、渡島管内八雲町と檜山管内熊石町が新設合併を行い、新「八雲町」が誕生しました。この合併により日本で唯一太平洋（内浦湾）と日本海に面する町になったことにちなみ、新たに「二海郡」という郡名が付けられました。

① 旧八雲町

・旧八雲町は開拓の祖、旧尾張藩主徳川慶勝侯が北海道開拓と併せて旧臣授産のため、遊楽部の土地の下付を願い出て明治 11 年 82 名を移住させたことから本格的に開拓が進められた。明治 36 年に鉄道が開通し、38 年に片栗粉同業組合の設立により澱粉製造業が急激に発展し、関東市場の覇権を握って“八雲片栗粉”の声価を博すようになった。明治 40 年１級町村制施行となり、７月現在地に役場庁舎を新築移転した。

今日、道南１の規模を誇る酪農ではチーズなどの乳製品あり、畜産では肉用牛の生産が盛んである。稲作としてもち米の生産をある。また、落部(おとしべ)地区ではホタテ養殖が盛んで水揚げ高 40 億円にも上り、北海道有数の水揚げを誇っている。

② 旧熊石町

・旧熊石町は江戸時代には松前藩領地であり交易や漁業で繁栄をし、最北端の関所が設けられていた。明治 35 年、熊石村として発足し、明治 20 年代頃まで村の産業経済の中心であったニシン漁は明治 30 年代以降不漁の年が多く、また箱館が道南の中心地となったことから地域活力も低迷を辿り、大正時代にはニシン漁は皆無となったためイカ漁、イワシ漁等への転換が行われた。昭和 35 年、有史以来最も多くの人口 1 万有余人を数え、昭和 37 年には町制施行となり、高齢化や過疎化が進む中で、地域活性化のために農漁業の基盤整備や平地区の開発等が進められてきた。

現在、稲作としてうるち米を生産しており、畑作では北海道を代表するネギの生産地になっている。水産業としてはスケトウダラの水揚げと併せアワビ養殖に力を入れており、道公社による人口種苗から漁業者の海中養殖まで一貫した生産体制が整っている。

（２）八雲町視察会議要旨

会議の冒頭、能登谷議長から挨拶を受ける。八雲町は明治の移住から 130 年の町で、先住民アイヌ民族が住んでいた。日本海側の熊石は松前藩の領地で江戸時代から発展していた。平成１７年の合併で日本で唯一太平洋と日本海に面する町となった。また、八雲地区は札幌や函館につながる国道や高速道などがありいろいろな施設が有るが、熊石地区は衰退している。そのため議会で議員定数が減少することになったが、八雲地区の議員

は賛成であったが熊石地区出身議員は反対であったとのことである。町村合併によるその後の問題がある様である。ちなみに能登谷議長は熊石地区出身である。議会への当庁も熊石からだと道路も狭く 1 時間近くかかるそうである。

なお、熊戸谷議長はエビネの大ファンで山香のエビネ祭りの事も承知しており、自ら所持しているエビネの写真ファイルを見せていただいた。

その後、佐々木直樹商工観光係長、南川達哉企画係長から居酒屋アンテナショップについて説明を受けた。

居酒屋アンテナショップは八雲町の取組ではなく、株式会社 funfunction（ファンファンクション）の合掌智宏社長からの町への働きかけで始まった。合掌社長の知り合いが八雲町に転勤をしてホタテなどの海産物を送ってくれて、その海産物が驚くほど美味しかったそうです。それで、社長は自分でも欲しくなって、八雲の海産物を求めて築地へ行きましたが無かった。北海道産としてなら売っていた。そして、八雲産を自分の店で売ろうと思ったそうです。しかし、飲食店としておいしいだけでは他店と差別化にはならないので、八雲町の名前をブランドとして使おうと合掌社長が考えたとのことである。

合掌社長が八雲町に見えて、生産者にプレゼンをし、そこで話が進みました。八雲町の協力と公認が欲しいということでした。店名に八雲町という町名を掲げるのは構わないが、公認はオープンした店を見てから判断することになりました。平成 21 年『ご当地酒場　北海道八雲町』1 号店はオープン、その後「公認」した。八雲町の役割は間接的取引で、町内の生産者の情報を提供するが具体的取引は会社と生産者で話をしている。

この会社の社員研修も八雲で毎年行っていて、研修中、町のガイドは役場が行い生産者と農業体験を通じて色々なことを学びます。八雲の町が好きになって東京に帰って、八雲の宣伝をしてもらっている。

平成 27 年に会社と八雲町は正式に連携協定を締結した。その後シンガポールにも北海道店として進出している。

（３）考察

アンテナショップは通常自治体が都市部に特産品の紹介等を目的に、自らまたは他自治体と共同で店舗を設置している。杵築市の福岡市に設置しているアンテナショップ事業もそうである。

しかし、視察目的である、八雲町の「アンテナショップ型居酒屋」は都心に複数設置されている。これは都心の居酒屋チェーン店が「八雲町の産品を使用したい事と居酒屋に八雲町の名称を使いたい」との要請があったことに始まる。

たまたま、東京の居酒屋チェーンの社長が八雲町の農漁産品が良質であることを知り評価したことにある。具体的にはホタテなどの水産品、野菜や牛肉などの農産品はお客さんに自信をもって提供できることと、他店と差別化のため八雲町の名称を使った「ご当地酒場」としたことにある。

八雲町としては同社の事業を確認のうえで連携協定を結び、農漁産品を生産している人たちを紹介している。最初は少量の生産物であったが「八雲店」がふえてきて、八雲の農家や漁師の供給量も徐々に増大しているとのことであった。

いま、農漁業生産品の６次産業化が言われ、杵築市においても杵築ブランドづくりと首都圏を中心にその売り込みに力を入れており、福岡にもアンテナショップを出している。

しかし、自治体が経費をかけず売り込みをしなくても、農漁業生産物が評価され自治体名義のアンテナショップ型居酒屋を出したいという申請

が出てくることはありがたいことであると考察した。（杵築市の農漁業生産物もそれぐらいの実力を持っていると思うが。）

また、これらの店内では、八雲町の宣伝広告物が貼られ八雲町に研修に来た店員がお客さんに八雲町の良さを PR しているそうである。八雲の生産物の利用と八雲町の宣伝活動と両面の効果がある。

さらに、違ったメリットとして八雲町のふるさと納税は「ご当地酒場八雲」がマスコミに紹介されだして以降増額し、2010 年 150 万円であったのが 2016 年度は 11 億 4600 万円となっている。これは「ご当地酒場　八雲」が来店したお客さんに PR してきたことと、八雲をはじめ北海道出身の首都圏在住者に八雲を再認識してもらった事ではないかとのことであった。そのため、返礼の水産物や牛肉、乳製品が増加して 1 次産業にとっては大きな貢献として返ってきたことになる。

視察委員から質疑の中では自治体の経費負担はないのかや、100％八雲のなのかなどが出たが。町としては負担金などを支出しておらず、生産者の紹介のみであることや居酒屋で使用される産品はほとんど八雲のもので、醤油も八雲産であるとのことであった。

いま、首都圏では地方自治体の認知を得て、地方の食材を利用する「ご当地名の店舗」が静かなブームとなっており、アンテナショプの新たな動きについて杵築市も重要な着目点としてとらえるべきと考察した。

（注）株式会社ファンファンクション出店のご当地酒場

・北海道八雲町　三越前店 2009 年 8 月、浜松町店 2010 年 8 月、
　日本橋別館 2011 年 6 月
・佐賀県三瀬村　ふもと赤鶏 田町本店 2012 年 5 月、ふもと赤鶏 八重洲店
　2013 年 11 月、ふもと赤鶏 丸の内店 2014 年 4 月
・カキ酒場 北海道厚岸 日本橋本店 2012 年 8 月、 牡蠣場 コレド室町店
　2014 年 3 月
・青森県むつ下北半島 神田小川町店 2012 年 12 月
・長崎県五島列島小値賀町 日本橋店 2016 年 8 月
・熟成魚場 福井県美浜町 日本橋タワー店 2015 年 6 月